

## 第三回 関東共同土建 安全大会議事録

日時 平成 27 年 11 月 28 日（土） 19 時より

場所 関東共同土建 本社

### ○開会の辞

代表取締役 中野輝敏

#### ・新入社員紹介

ベトナム実習生を始めとする新入社員に対して、作業手順だけではなく、安全面においても皆が教育するという意識を持って接するように。

#### ・安全大会の意味

会社が仕事を失う要因の第一は「事故」である。

工事だけではなく、車両も含めて、誰かが死んでしまうような事故が起きれば信用と共に仕事は失われてしまう。

無事故でそこにある仕事を完了するという事は当たり前である。

事故を起こすような業者は使ってもらえない。

今まで努力してきたこと、実績が一つの事故で全て失われてしまう。

「自分はちゃんとやっている」「自分は事故を起こさない」という個人スタンスだけで仕事を進めていたとしても、協力業者が事故を起こしても結果は同じである。

近隣に迷惑をかけた、工期を守れなかったといったことも事故と同じといえる。

そんなことにならないよう、皆一人一人が高い意識をもって、「事故を起こさないのは当たり前」の事だと（楽観的な意味ではなく、注意深く起こさないように細心の注意を払っているという意味である）、自分だけではなく、周りの人間も、協力業者も事故を起こさないのは当たり前であるという意識をもって仕事をしてもらいたい。

会議は参加すればいい、先輩だから言えない、同じ会社じゃないから言わない、といったレベルの低いことではなく「事故を起こさない」ということを最優先として立場を超えて、それを第一に考えた行動が出来る人たちの集まりにしてほしい。

注意を受けた人間は素直を受け止め、反発せず、自制し、再発しないよう努める心掛けをしてもらいたい。

皆が十分に意見を出し合い、ルールを決め、それを軽く扱わず、真摯に受け止め、真剣に対応してもらいたい。

- ・付帯事項（訓話）  
建設業界の展望について（後述記載）

### ○第三回のテーマ

「不注意」を抑制するための「声掛け」の重要性について

本年下半期、軽いものではあるが事故が多発している

- ・重機が設置物にぶつかった
- ・ダンプが通行中に壁に当たった。
- ・工事中設置物を壊してしまった
- ・重機の旋回中にバケットに当たって、人が跳ね飛ばされた

これらが発生した原因は全て「不注意」によるものである。

もちろん事故を起こさないことが最も大切なことであるが、残念ながら事故が起きてしまった場合には、この事故を活かして、再発しないよう意識をすることが重要である。

事故が起きてしまったら、当事者はその事故の発生状況原因等を可能な通信手段を使って、皆に伝達しなければならない。事故が起きた現場に居なかった人も、経験しなかった事故の要因をなるべく共有することにより

- ・どういう状況で事故が起きたのか
- ・何が原因なのか、何が不足していたのか

という情報を認知し、その結果、その事故は「どうすれば防げたのか」という原因究明の元に、「同じ事故を起こさない」という意識を持って、起きてしまった事故を無駄にせず、自己の経験として事故を未然に防ぐために必要な「常日頃より心掛けなければならない安全対策の心掛け」に加えていかなければならない。

また、安全にかかわることは、立場の上下を超えて発言し、それを受け止められる環境を作らなければならない。

第二回安全大会のテーマでもある「声掛け」をもっともっと大切にしたい

「合図」「誘導」「返事」という従来だけの声掛けではなく

- ・分からない事を教えるということ教える教育という面での声掛け
- ・分からない人は自ら尋ねると教わる教育という面での声掛け
- ・自身が気付いた事を人に伝える助言という声掛け
- ・伝えるという声掛け、返答をするという声掛け

従来の声掛けをもっと広げ、コミュニケーションまで意味を広げた声掛けが必要である

十分なコミュニケーションが取れることで、安全面だけではなく、仕事面でも今何をしているのか、何のためにやっているのか、これから何をしようとしているのかが分かる。

#### ○第三回安全大会の目標

声掛け運動を意識し、最低限の目標として次回安全大会まで続けてほしい。そして、次回の安全大会でその報告をして頂きたい。この結果、多発していた事故が減るのか、無くなるのか見ていきたい。

#### ○閉会の辞

工事部部长 谷岡寛隆

コミュニケーション。まさに今日現場で思った事がある。

最近の事故で跳ね飛ばされた人が重機に乗っていた。が、自分が跳ね飛ばされた経験があるのに、回りの人間に対して何も注意せず、自らも注意を払っていないように見えた。まさに経験を何も活かしていないとはこの事である。

いくつもの現場を回っていると、朝礼で注意したこと、実に良い返事をするが、いざ作業がスタートすると、まったく実践できていない現場によく出会う。

せっかく声掛けをしても、言われた方がよけいな事、という態度を出している人によく出会う。

「結局は事故につながっている」

コミュニケーションを取る事がいかに大事なことが、皆分かっているのだから実践してほしい。誰もが率先して行うことで、協力会社の人たちにもそれが伝わる。

今回の安全大会の結果が実践されてるかどうか、安全大会を口だけにしないために、各現場や様々な部分で検証する。

安全大会を形だけのものにしないようにするので、各自実践するように。

## ○訓話

建設業界の展望について

代表取締役 中野輝敏

なぜ働くのか「会社の為」「自分の為」「生活の為」「家族の為」「趣味の為」様々な理由があると予測する

経営者と労働者では考え方、働き方が違うと言われることがある。

しかし互いが必ず一致していることがある。「お金を稼ぐ」ということ。

会社が稼ぎ利益をあげるのは会社が存続し続けるためである。売上が高くとも、利益が出なければ会社は倒産してしまう。当たり前のことである。

しかし「当たり前」とは実は一番難しい。

かつて日本の建設業界はバブル時代を経験した。

仕事が溢れていて、下請けが仕事を選びという現在では考えられない時代だった。

バブルがはじけ、不景気な時代になると、その時は「当たり前」だった、今考えれば生意気なことをしていた会社は皆倒産してしまった。

「仕事があって当たり前」という時代が終わった。業務対価は下がり、またそれに対応できない会社も同じように消えていった。

付き合いがあれば仕事がある、ではなく、さらに安くなければ仕事をとれない時代がきた。

「安いことは当たり前」となり、仕事をとる上で付加価値とは言えなくなった。

更には「安くても良い仕事をするのが当たり前」な時代に突入し、安かろう悪かろうの時代も終わった。

今はコンプライアンス、エコ、リサイクルが「当たり前」に求められる時代になってきた。

世の中の変化のスピードはさらに上がっている。中小企業でもグローバル化が進み、海外へ支店を作ったり、海外研修生を「当たり前」に使う時代になっている。

機械の進歩もスピードアップし、熟練した技術者でなければ難しいと言われた仕事ができるようになってきた。いずれこれも「当たり前」になる時代が来るであろう。

移民制度、TPP など政策分野でも大きく変わろうとしている。

会社は時代の変化についていかなければならない。

労働者の人員の教育、質、法律や規制にあわせた政策なども他の会社が実行している。

他の会社がやっているのに、うちの会社がやっていない、ついていけないとなると、会社はどんどん衰退してしまう。

会社は特定の誰かのものではなく、働いている皆で作り上げるものである。他人事ではない。皆が成長することで、会社も成長する。人を育て、会社を育てて頂きたい。多面的な意味で皆が会社の経営に加わってほしい。

育てたのは、作ったのは、良くしたのは自分だと胸を張って言えるように取り組んでいてほしい。いいことも悪い事も結局は自分に跳ね返ってくる。良いことがたくさん跳ね返ってくるような会社にして頂きたい。関東共同土建で働いていてよかったと思える会社造りをみなさん自身がやってほしい。